

海域の概要

本湾は、対馬の中央部に存在する湾で、複雑な溺れ谷地形となっています。湾内では真珠やブリなどの養殖が行われています。湾東部の万関瀬戸で、三浦湾とつながっています。



Specification

諸元

湾口幅：4.18 km

面積：53.61 km²

湾内最大水深：8.0 m

湾口最大水深：8.0 m

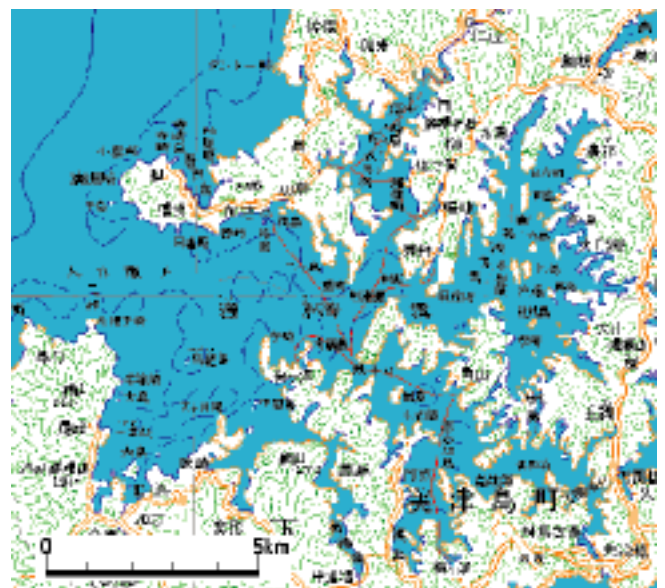
閉鎖度指標：1.75

備考：環境基準類型指定水域

Location

範囲または位置

長崎県下県郡美津島町万関橋、大船越橋、同郡豊玉町小松崎と同郡美津島町郷崎を結ぶ線及び陸岸により囲まれた海域。



環境

対馬の中央西岸から深く入り込んだ溺れ谷で、湾口を朝鮮海峡に開いています。気候は、島の周囲を北東に流れる対馬暖流の影響を受けて比較的温暖ですが、冬季には北西季節風が吹き荒れます。湾奥部は大船越瀬戸・万関瀬戸の2カ所で対馬海峡とつながっています。

湾内には汚濁要因となるような大きな流入河川はありませんが、昭和50年以降の魚類養殖の急速な発展により、水質悪化が進み、昭和55年6月にはコックロディニウムを原因種とする赤潮が浅茅湾全域で発生し、ブリ養殖業等に多大な被害を及ぼしました。

また、魚病の発生も恒常化しており、養殖技術の改善、沖合化を含めた漁場の再配置等の対策が求められています。

自然

浅茅湾は、対馬の上島と下島の間にある沈降によるリアス式海岸で、吉岐対馬国定公園に指定されています。大小無数の入り江は悠に1000を超え、その海岸線の延長は360kmに達するといわれています。また、湾内の小島は58を数えます。

湾内に藻場は少なく、湾口部の大口瀬戸付近にガラモ場が分布しています。



金田城跡からの浅茅湾

文化歴史

美津島町は、古くから大陸文化伝来の窓口として、また、朝鮮半島との交流、外交の拠点として重要な役割を担ってきました。663年に日本は白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に敗れ、朝鮮半島からの撤退を余儀なくされ、「日本書紀」によると667年に防衛上の理由から金田城が築かれました。

金田城は朝鮮式古代山城と呼ばれるもので、石塁や土塁を築き、城門や水門を構え石塁の延長は2.8kmに及び、低いところで2~3m、高いところでは4~5mに達します。

なお、平成5年(1993年)から金田城跡の発掘調査が実施されました。

産業

対馬暖流の恵みと、複雑な海底地形を活かした水産業が盛んで、外海における漁船漁業では、イカ釣漁業を中心に、西沿岸でのブリ飼付漁業、全島地先での定置網漁業が盛んに営まれているほか、タイ、ブリ釣漁業、ヨコワひき縄漁業、シイラ漬漁業、恵まれた根付資源を対象に採介藻漁業などが行われています。また、複雑な入り江に富む浅茅湾を中心に真珠、真珠母貝、ヒオウギガイ養殖及びブリ・タイ等の魚類養殖が行われています。

本湾の真珠養殖の歴史は古く、大正時代には島外業者によって導入され、戦後は地元漁業者による養殖も行われるようになりました。また、本湾に広く生息する天然のヒオウギガイの稚貝を採苗し、養殖を行っています。現在、販売促進と販路開拓、加工品の開発が図られています。

また、本湾は対馬観光の代表的な拠点となっており、釣場の宝庫としても釣り客に喜ばれています。



ヒオウギガイ